

障がい者の支援に関する困惑と真のニーズ

酒井 由佳里

障害とは

障害者基本法の定義として「障害者」とは、身体障害、知的障害又は精神障害（以下「障害」と総称する。）があるため、継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける者をいう。

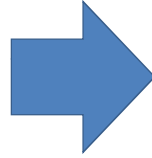
先行研究

障がい当事者と支援者の間で暗黙に生じている支援への認識の違い—認識のズレの存在を示唆

大川・古川・本田(2012)

支援の内容によって二次障がいを防ぐことができる

高野(2013)



目的

- ①障害に関する知識のズレが起こる要因
- ②障がい者がしてほしい支援と実際のズレが起こる要因
- ③障がい者への支援のズレが2次障害に発展する要因

方法

『面接調査対象者』

ノートイク実行委員長から紹介された19歳から22歳の学生6人を対象に聴覚障害の方5人と身体障害の方1人に面接調査を実施した。なお、聴覚障害の学生A1～A5と表記し、身体障害の学生をB1と表記した。

『面接調査時期』

10月下旬から11月初旬

『質問項目抜粋』

- ・ 学校生活の中で障がいによる否定的評価を受けたことがあるか
- ・ 障がいに関する傷つきを誰に、どのように相談したいと思うか。
- ・ 学校生活の中で障がいのことでこんな支援をしてほしい、もしくはこんな支援はしてほしいと思うことはありますか。

* 同じ項目で移動手段、レクリエーション・レジャー、キャリア・進路、家族関係、地域での関係恋人・親密な対人関係、最後に今までの質問含め、私や周りの人をお願いや伝えたいことはあるか質問を行った。

結果

参加者による支援のズレの要因の共通点

- ①「障害に対する固定観念」
(口話で慣れているため手話をされてもわからない)等と答えていた。
- ②「過度な支援」
(介助されすぎる)(自分で出来ることは自分でやりたい)等と答えていた。
- ③「ソーシャルサポート」
(参加者が親や友人を相談相手に挙げていること)

考察

- ①「障害に対する固定観念」:「聴覚障害＝聴こえない・手話ができる」という障がいに対する固定観念を無くすことが大事と考えられる。
- ② 参加者A5が挙げるように「過度な支援」に対し「できないと思われてる、それくらいできる」のように、他者からの低い評価により自己有用感、自信が持てなくなり行動が制限された可能性が考えられる。
- ③ 2次障害を防ぐためには「過度な支援」「障害に対する固定観念」を理解したうえでソーシャルサポートを行い、本人の自己肯定感を守り2次障害を防ぐことができると考えられる。

